

り簡単に卒業ができるという状況が強いんです。だから、「東大生」と聞くと、みんな「すごいね」となる。あまりにも大学入試というハードルを越えることに熱意を上げすぎていて、大学教育自体が十分に充実したものになっていないのではないかと、これを長年みんなが思っていました。コロナ禍におけるオンライン講義はこの課題を解決するチャンスがあるのではないかと、思っています。

今のような入試のハードルが高い状況では、そこには相当お金をかけられる人しか越えられないということになります。また、住んでいる場所によっても、塾などの環境が整っている所やそうでない所で有利や不利という状況があります。どんな所に住んでいても、どんな所得の人でも大学教育を受けるチャンスが出てくるという、教育の門戸を広げるという意味がオンライン講義にはあると思います。もちろん、入学してからどのくらい学習成果を上げるのかというのは学習者の努力次第ですが、少なくともそのチャンスが特定のみに偏るというのは望ましいことではないので、学校教育というのは幅広くチャンスを与えて、そのチャンスの中で優秀の人を選び出すということをするべきだと思います。大学入試が変わると、高校教育、中学校教育、小学校教育の在り方にも大きな影響が出てくると思います。

また、現在行われている入試にも能力を測るということでは大きな限界があると思います。一発勝負の筆記試験や面接試験ではなく、大学4年間で様々な授業を受けて、先生や学生同士との多くのディスカッションを行い評価されるのであれば、多面的な評価ができると思います。現在様々な方法での入試が実施されていますが、限界はあると思います。その限界のある入試に向けて良い成績を収めるようにみんなが勉強している。その入試のための勉強はやはりある種のゆがみが出てきてしまうと思います。選抜試験に100%ベストなものはありませんが、入学は広く機会を与え、大学4年間で多面的に評価することで、よりゆがみのない形で評価ができていくのではと思います。

－今回の埼玉教育のテーマの一つが「生涯にわたる学びの支援」となっております。柳川教授は40歳定年制を提唱されています。

40歳前後にスキルアップが必要ではないかということが大きなポイントです。人生百年時代を迎えて、働く期間がだいぶ長くなりました。たとえば、20歳から75歳まで働くとして55年間あるわけです。55年間同じスキルで働き続けるのはやはり無理があるのではないのでしょうか。40歳でこの先の20～30年をしっかりと働くためには何か新しいものをインプットしたり、必要

なものを考えたりする機会や期間が必要ではないかと思ったのです。政策的にいうと、1～2年しっかりと勉強し直したり、スキルを磨き直したり、他の仕事をするための能力開発をしたりする機会です。会社を作ったり、他の仕事に移ったりしてもよいと思います。

一般の企業の方は、55歳ぐらいになると定年後の生活をそろそろ考え始めるのですが、私はそれでは遅いと思っています。40歳というところの職場でもバリバリ働いている人が多いので、定年後のキャリアを考えてというアドバイスはもらえません。でも言われない時期からセカンドキャリアをしっかりと考えて準備しておくことが、生き生きといつまでも働くために大切です。



【感染対策で厳戒中の東京大学本郷キャンパスにて】

－私も今年45歳になりましたので、何かを始めなくてはという気になりました。小学校でプログラミングが始まったのでプログラミング言語を本格的に学んで行こうかと思っています。

今のリカレント教育という考え方に少し誤解されているところがありまして、何も新しい時代に向けて新しい能力を身に付けなければいけないということではないのです。もちろん、新たなインプットは大切です。そのような新たな能力を新しく身に付けることが必要な人もいます。でも大多数で必要なことは、「自分がやってきたことの整理」だと思うのです。特に社会科学の経済学とか経営学とか法学などもそうですが、そのような学問は新しいことを学ぶというよりは、社会人の自分がやってきたことはどういう意味があるのか、どのような普遍的意義があるのかということを整理事ることが大切と考えます。つまり、個別具体的なごちゃごちゃとした経験をもうちょっと普遍化させて理解することができれば、全く違う環境へ赴任したときや違う会社に行ったとき、違う事例にあったときに使えるようになるわけです。

「個別具体的な経験を抽象化して理解をする」とことは「普遍化する能力になる」ということで、このことがリカレント教育の大きなポイントなのです。

教育学の専門家ではないので分からないのですが、皆さんの立場でいったら、教員の経験や具体例をもって教育学のテキストを見ると「私の実践は、ここに書いてあった。」ということになると思うのです。無味乾

燥の理論が書いてあると思われたテキストが、そこに自分の具体例がはまっていくと全く違ったものとして理解が進んでいくと思います。リカレント教育の本質はこういうことだと思うのです。言い換えると、自分の「経験」をどう将来の「武器」にしていくかということです。「経験」だけでは「武器」になりません。「武器」にするためには、普遍化するという作業が必要【普遍化することで武器になる】になってきます。



—昨年、先生は「教養」に関する本を出版されました。子供たちがこれからの社会を生きていく上で身に付けておく資質・能力とはどのようなものでしょうか。

月並みの言い方という一つは「答えのない問いを考える」ということ。もう一つは、「新しい結びつきを考える」ことでしょう。違う事柄の共通点を見つけ出すということです。今、圧倒的に必要とされている能力だと思います。今まで関係なかったような企業や技術を結びつけることです。この技術とこの技術を結びつけるとおもしろいことができるかもしれないとか、この人とこの人を結びつけると新しいアイデアが生まれるかもしれないということです。こういうことができる人材が非常に求められています。いわゆるオープンイノベーションの時代がくるということです。既存産業の縦割りの中ではイノベーションは生まれにくくなっています。昔でしたら、自動車産業は自動車産業、電気産業は電気産業で決められた製品開発をしていればよかった。エンジン効率の良い車を作ればよかったし、性能のいいパソコンを作ればよかったのです。ところがそれぞれの性能には限界があるので、違う産業同士の結びつきが求められて新しいものを作り出すことが求められています。具体的な事例としては、トヨタとアマゾンやNTTなどが連携し、車自体がIoTとなるような製品が生まれるようになっていきます。オープンイノベーションの時代では、既存産業の枠を取り払い、新しいことを考えることが求められています。今までの路線の中だけで考える人だとそこからアイデアは出てきません。そこから飛び出して新しい結びつきを考えられる人が今、求められています。

学校では、全然違うものから、共通点や相違点を探し出す、見つけ出すという訓練をするとよいと思います。

総理大臣もお話ししていますが、縦割りの弊害はいろいろなところで起きています。我々の学問分野も既存の学問分野だけで決まるのではなく、学際的な研究をどうするかということで「文理融合」と

いうことが求められています。具体的には、私の専門とする経済学と今コラボレーションしているのは工学部でAIの研究をしている松尾研究室です。皆さんの分野でいうと、国語や数学などの教科の枠を飛び越えたインタラクション（相互作用）のような学習ができるとおもしろいと思います。

やはり、教える側が教科の枠や既存の枠組みを越えられないと、児童生徒の側もその枠にとらわれてしまいます。先生自身が越えられなくても、少なくとも生徒が越えていったときに応援する姿勢であってほしいと思います。

—最後に、教職員へ向けてアドバイスをお願いします。

今回のコロナによって、5年ぐらいかかる変化が3か月ぐらいで起こったといわれているので、かなり大きな影響が今後出てくるのではないかと思います。人々が必要とされるスキルだとか要求される能力なども変わってくると思います。新しい能力だから、新しい教科を作らなければという議論になるのですが、必ずしも



【好奇心の芽を掘り起こす】

そうは思いません。もう少し本質的に、「新しいものを自分で吸収していく能力」が大切なのではないかと思っています。「これが新しいから、これを学びなさい」という受け身の学びではなくて、生徒が自分で新しいものを見つけて、自分でそれを獲得していくことが求められると思います。

これは元をたどると「好奇心」だと思います。「これを知りたい」「あれを知りたい」ということを大切にしてほしいです。小中高特の先生にはぜひ、その好奇心の芽を摘まないでほしいと思います。学校教育は残念ながら試験があり、単位を取らなければいけないので好奇心の芽が摘まれがちです。試験でよい点を取ることだけをやっていたので、好奇心を失ってしまった学生がうちの大学にもいます。私たち大学の教員の仕事は、埋まってしまった好奇心の芽を掘り起こすという作業をしています。「何がおもしろいと思う?」というそこから始めなければいけないのです。

「大学入試が終わったらこれからは好奇心を持ってください」という状況は子供たちにとって不幸すぎます。入試のための勉強ではなく、「この勉強おもしろいな」「この研究してみたいな」という教育をしてほしいと思います。理想論ではありますが、コロナによって見えてきたことでもあります。

好奇心の芽を育てる ～コロナ禍によって見えてきたもの～

[プロフィール]

1963年生まれ。中学卒業後、父親の海外転勤に伴いブラジルへ。ブラジルでは高校に行かず独学生活を送る。大検を受け慶應義塾大学経済学部通信教育課程へ入学。大学時代はシンガポールで通信教育を受けながら独学生活を続ける。大学を卒業後、東京大学大学院経済学研究科博士課程修了。経済学博士（東京大学）。「東大教授が教える独学勉強法」（草思社）。「東大教授が考える新しい教養」（幻冬舎新書）など著書多数。

東京大学大学院経済学研究科 教授 やながわ のりゆき
柳川 範之



新型コロナウイルス感染症の拡大で起きた大きな変化の一つに、オンライン講義の急速な広まりがあります。この大きな変化は、教育の未来に何をもたらすのか、経済学の分野に限らず多くの提言をされている東京大学柳川範之教授に、インタビューさせていただきました。

－まず、先生御自身の中学～大学時代のことについてお聞かせください。

中学校を卒業した後、銀行員だった父親の転勤でブラジルのリオデジャネイロに行きました。日本人学校は中学校までしかなく、ポルトガル語が全く分からなかったもので、現地の学校へ入らずに、自分で勉強しようと決めました。日本から高校の教科書や参考書を大量に買い込んで、船便で送ってもらいました。学校には行かなかったの、独学で勉強をしていました。日本の参考書や問題集は非常に充実しているので、一科目について2～3冊の参考書を見比べて、問題集を自分で解いて勉強していました。とはいえ、誰からも強制されないの、あまり勉強せず、かなりの期間リオのビーチで遊んでいました。普通の高校生に比べれば全く勉強していなかったと言えると思います。その後、大検（現在：高等学校卒業程度認定試験）を受けて、慶應義塾大学の通信教育課程を受験し、入学しました。その頃父は、シンガポール勤務となっていたので私もシンガポールへ行きました。帰国してスクーリングの際に、大学へ行くぐらいで、それ以外は自分で勉強をしてレポートを出すなどをしていました。私はその時公認会計士を目指していたので、大学は卒業資格さえあればいいと思っていました。通信教育課程は比較的入学の門戸が広く、そこで勉強をし



【高校時代は独学だった】

て、しっかりと勉強した人だけが卒業できるというものです。私が今までの学校生活の中で、学生の立場だったり、教員の立場だったりしますが、一番みんなが真剣にそして熱心に授業に取り組んでいるのはスクーリングの授業ですね。これは、働きながら勉強に来ている人がほとんどで、本当は遊べる夏休みを1か月も東京に来て勉強するという人は、やはり熱意や思いが違います。当時はエアコンもなく、扇風機一つで、みんな汗だくになりながら「学びたい」という思いで授業を受けていました。その熱意がもたらす勉強の成果は非常に大きいのではないかと思います。「学びたい」という強い欲求を持ったときに学ぶべきであると思います。

－今回のコロナ禍において、教育はどう変わっていきと思われませんか。

コロナ禍でみんながやらなければならなくなったのが、オンライン教育です。キャンパスに行かずに講義を受けるということができるようになりました。この影響は非常に大きくて、二つの意味でリアルと違います。一つは、「その場所に行かなくてもいい」ということの自由度です。東大であれば東京にいらなくてもいいということで、九州にいても北海道にいても授業は受けられるということです。もう一つは「キャパシティの制約がなくなった」ということです。教室の制約がなくなったということで、最大収容人数300人の教室しかなければ、300人しか学生は採れません。だから大学には定員があり、定員があるために入試があります。キャパシティの制約がなくなれば入試をやる意味というのが大きく変わってくると思います。入りたい人をどんどん入れて、入学させます。しかし、卒業資格を与えるのではなく、大学の授業について行けなければ単位は与えず、卒業はさせません。つまり、「どこへ入学したか」より、「どこを卒業したか」を重視するという方向に変えていく大きなチャンスなのではないかと思っています。日本の大学教育はどこの大学へ入ったかということをしごく重視して、入ってしまえばかな